非対面のボランティア的行為と想像力

――献血者の意識構造の分析

キーワード：非対面のボランティア的行為、社会的連帯、想像力、献血、中間集団

人間共生システム専攻
吉武　由彩

1　問題設定

本論文は、中間集団の衰退や不平等、格差の増大等が問題となり、連帯の再考が必要とされる現代社会において、非対面のボランティア的行為による社会的連帯の形成を考えるものである。非対面のボランティア的行為として献血を事例に、ボランティア行為者間の「想像力」を媒介とした関係に着目して考察する。

まず、「ボランティア的行為」とは、いわゆる一般的なボランティア活動だけでなく、伝統的な近隣相互扶助も含むとする、鈴木（1987）の議論を参考に、自発性、援助性、無償性、継続性の要素を満たす、一般的なボランティア活動、近隣相互扶助、献血、寄付・募金等を広くボランティア的行為として捉える。なお、以下において、「ボランティア的行為」と「ボランティア活動」を区別して表記する。次に、ボランティア的行為は、行為の担い手と受け手とが直接に接点を持つボランティア活動や近隣相互扶助等の対面のボランティア的行為と、直接に接点を持たない献血や寄付・募金等の非対面のボランティア的行為に分けることができる。本論文で扱う献血は、非対面のボランティア的行為である。

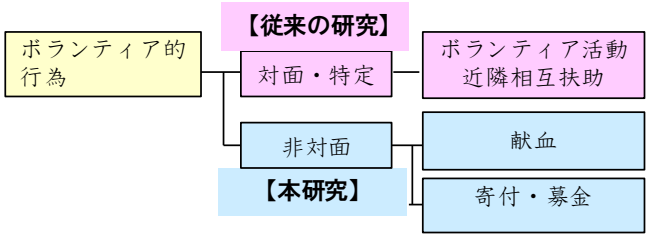

図１　献血の位置づけ

そして、非対面のボランティア的行為を研究する背景として、現代社会においては格差の増大等人々の異質性の増大がある。そうした中で社会的連帯の形成のためには、異質性に基づく新たな他者理解として、自らと異なる見えない他者を理解し、思いやるという「想像力」が、今後はより必要となる（白波瀬 2010）。また、地域や親族共同体といった中間集団の衰退等従来の対面による連帯が後退しつつあり、連帯の再考が必要になる。そこで本論文では、献血を題材に社会的連帯の形成を考える。その際、想像力に着目する。社会的連帯については、社会学小辞典において「諸個人間の相互依存関係」と定義される。本論文では、この社会的連帯の定義に加え、献血という非対面のボランティア的行為によって、社会的連帯が具現化すると考える。

献血の現状に関しては、全国における献血率は 4.2%、献血者の内訳は性別では男性 67.4%、女性 32.6%、年齢階層別では、50 歳未満の層においてその 8 割以上が担われている（日本赤十字社血液事業本部 2009a）。献血者数の推移については、近年減少傾向にあり、特に 10 代、20 代において減少が著しい（厚生労働省 2011）。一方、血液製剤の使用については、50 歳以上の人々に全体の約 85%の血液が使われている。また、疾病別輸血状況では、がんへの血液の使用の割合が最も高い（東京都福祉保健局 2009）。

2　先行研究の整理

Titmuss（1973）は、モースらの研究を参考に、献血をボランタリーな贈与関係として捉える。モースやレヴィストロースは、未開社会における贈与や交換は、個人や集団間の友好関係や連帯を生み出すとした。このモースらの議論に依拠し、Titmuss（1973）は、献血という血液の贈与も、社会の連帯を作りだすものとして作用すると考える。ただし、モースらの場合との相違点も存在し、モースらにおいては、互いに知っている人々の間での贈与であるが、献血では見ず知らずの他者への贈与である。これを Titmuss は“stranger-relationship”と表現する。モースらにおける未開社会の場合と差異はあるものの、集団における贈与が集団の連帯を強化するという議論を応用し、Titmuss は献血による社会的連帯の形成を考える。

Titmuss が献血をボランタリーな贈与行為と捉えたように、藤村（1987, 1999）は寄付行為をボランタリーな贈与行為とし、交通遺児への修学支援活動等を行う「あしながの育英会」の「あしながおじさん」制度に着目して研究を行った。「交通遺児育英会」、「あしながおじさん（寄付者）」、「交通遺児」の 3 者関係について分析し、特に、「あしながおじさん」と交通遺児の関係は、想像力による相互贈与関

係であるとする。非対面であり、直接会うことはないものの、交通遺児育英会を通して「あしながおじさん」から交通遺児に寄付が渡され、代わりに手紙が贈られる。この際、想像力は、「不在の、あるいは非在の対象を構成し措定する意識力のことであり、＜いま・ここにいる・自分＞を基点とする意識がそれを離れて、＜いつか・どこかにいる・他者＞へと志向すること」（藤村 1987: 377）と定義される。本論文では想像力の定義については、藤村（1987: 377）に依拠する。

3　ボランティア的行為の形成要因

非対面のボランティア的行為については先行研究だけでなく、形成要因について手掛かりを得ることができる意識調査や官公統計等も少ない。そこで、先行研究等も多い対面のボランティア的行為についても形成要因を併せて整理する。

非対面のボランティア的行為について、献血は男性で多く、年齢では50歳未満の層において担われている（日本赤十字社血液事業本部 2009a）。また、家族や友人に献血者がいる場合ほど、献血をする（厚生労働省 2008）。献血に関する様々な認知度についても、献血者の方が献血未経験者よりも高い（厚生労働省 2008）。対面のボランティア的行為の形成要因については、性別では女性や年齢が高い層で（稲月 1994, 仁平 2008）、階層では高階層の人ほど（鈴木 1987, 仁平 2008）、ボランティア活動をする。また、定住層や要介護者有の場合（稲月 1994）、地域とのつながりが深い場合（高野 1996）ほどボランティア活動をする。

4　非対面のボランティア的行為の構造

福岡県福岡市において調査を行った。調査については、調査Ⅰと調査Ⅱが存在し、調査Ⅰは、調査Ⅱのプレ調査としての位置づけである。調査Ⅰで献血者がどのような想像力や意識を持っているのかについて献血者全般を対象に確認し、その上で調査Ⅱで多回数献血者を対象に、どのような想像力を持っているのかを分析する。なお、献血者と受け手との関係が、想像力を媒介とした関係である。

調査Ⅰ概要

献血バスに献血に来た献血者を対象に質問紙調査を行った。サンプリングの問題はあるが、2011年4月の5日間献血バスに同行し献血会場において質問紙を配布、回収した。対象者は、期間中に献血に来た献血者403人（男性53.1%、女性46.9%）である。

調査Ⅰ結果

調査の結果、想像力に関しては、献血者はあまり受け手を意識していなかった。その中でも受け手を意識するとした人々に受け手について尋ねたところ、手術や病気という実際の受け手と合致する受け手を想像する人々がいる一方、けがや事故という実際とは異なる受け手を想像する人々がいた。また、「困っている人」というぼんやりとした想像力を持つ人々がいた。次に、献血はお互いさまであるとする割合が高く、献血者の意識として献血は互酬的なものである。そしてその助け合いの範囲は、「地域とは関係なく」や「日本全体」との回答が多く、広い範囲における助け合いである。

以上の知見から、献血の互酬的なイメージは、「立場性の転換」としても言い表すことができる。献血者は、「献血はお互いさまである」という互酬的感覚や、「将来自分や家族が輸血を受けるかもしれないから」等の意識を持ち、その意味でも、献血者と受け手ははっきりと立場性が固定された関係ではなく、転換される可能性を献血者自身が感じているのである。

5　多回数献血者に対する聞き取り調査

調査Ⅱ概要

献血ルームにおいて多回数献血者を対象に、どのような想像力を持つのか、聞き取り調査を行った。想像力を検討するに当たり行為の継続性を重視し、多回数献血者として、これまでの総献血回数50回以上の献血者に限定した。この50回という献血回数の妥当性について、50回以上の献血者となるためには、2週間に1回定期的に献血を行ったとしても2年以上の継続が必要となる。既存の調査では10代、20代における累積献血回数30回以上の献血者は全体の2.4%である（厚生労働省 2008）。非対面のボランティア的行為については、先行研究や統計データが少ないため、総献血回数50回という基準の妥当性に関しては、ここまでしか述べることができない。

調査は、半構造化面接によって行い、通常版と追加版の2通りの聞き取りを行った。通常版の調査は6月から11月にかけての12日間、のべ80人の献血者に対して行った。追加版の調査は後述の③抽象型を持つ献血者7名（A～G氏）に対し行った。

調査Ⅱ結果

想像力について、献血の動機と関係があることがわかった。具体的には、動機の類型によって献血者の持つ想像力は、3つの想像力と1つの非想像力・利己的動機型に分けられた。動機と想像力の対応は表1の通りである。献血者の持つ想像力については、「献血においては、血液の受け手は見えませんが、見えない人でも助けられるのはどうしてで

すか。相手が見えないため、必要性が強く伝わらないことや、受け手への共感が難しいなどの困難はありませんか)」というワーディングで尋ねた。

表１　献血動機と想像力の類型化

動機の類型化		想像力の類型化	
a	被援助経験	①	可視型
b	職業経験（医療関係）		
c	自身の手術経験	②	共感型
d	血液の希少性(Rh-)		
e	家族や友人の献血者	③	抽象型
f	家族や友人の医療関係者		
g	外部からの呼びかけ		
h	誰かの役に立てば		
i	自分のため（検査結果）と 人のため半分ずつ		
j	血液の検査結果 (自分のためが強いという類型)	④	非想像力・ 利己的動機型
k	その他		

想像力の１つ目、①可視型とは、動機ａ「被援助経験」や動機ｂ「職業経験（医療関係）」等の直接経験がある場合である。経験により、実際は血液の受け手は見えないものの、受け手が「見える」かのように感じる、可視的な想像力である。ただし、被援助経験や職業経験はあるものの、それが動機、ひいては想像力につながらない場合が存在する。よって、①可視型は、経験が想像力につながる（1）可視型と、つながらない（2）きっかけあり抽象型にさらに分類できる。(2) きっかけあり抽象型は③抽象型に近く、そのため、③抽象型と同類型として扱い、合わせて分析する。

次に、②共感型は、動機ｃ「自身の手術経験」や動機ｄ「血液の希少性（Rh－)」により、血液の必要性等が「わかる」と感じる想像力である。①可視型や②共感型は、直接経験等が条件となり想像力が喚起され献血につながる。非対面の行為であっても、依然として対面の影響力が大きい。

そして③抽象型が、本研究で中心として取り扱う想像力型である。③抽象型は、受け手をあまり意識しない場合や、「何かの役に立つんだろうな」というぼんやりとした想像力を持つ場合である。

ここで、3 つの想像力の可視化の程度を確認すると、可視度が高い順に①可視型、②共感型、③抽象型となる。ただしここでの可視化の度合いは、良い、悪いという価値判断を含まない。本論文では、①可視型がより可視的な想像力を持ち優れているという議論ではなく、むしろ明確なきっかけはないが想像力を持つという③抽象型に、社会的連帯の形成への可能性を見出している。なお、想像力とは、見えない他者を志向するというものであるので、利己的動機が大きな部分を占めて献血をしている場合は、想像力の議論に当てはまらない。

さて、A～G 氏の語りから、③抽象型は、献血を「できる範囲で」と捉えていて、「時間があるとき」に行くのであり、自己を犠牲にしてまで献血を続けることはあまりない。つまり、③抽象型を媒介とした献血は、拘束力の働きにくい弱い連帯によって成り立っている。しかし、手帳に次回の献血可能な日をチェックする等、弱い連帯ではあるが、その弱い連帯の強さがある。ただし③抽象型は弱い連帯でもあるので、なんらかによって支えられなければならない。

③抽象型を支えるものとして、「時間の余裕」、「青年期までの経験」、「意味づけ」、「他者からの働きかけ」、「被援助経験、職業経験」の大きく 5 つがある。「時間の余裕」は、現在その個人にどれだけ時間の余裕があるかということであり、時間に余裕があることに支えられている側面がある。「青年期までの経験」は、個人がどのような定位家族で育ったか、青年期までに就いた職業がどのような職であったか、青年期まで等に育ってきた地域がどのような地域であったかということである。「意味づけ」は、献血における非日常を楽しむ等自己の満足度を高めるものとしての意味づけがある一方、献血自体へ価値ある行為として高い意味づけが置かれること等である。「他者からの働きかけ」は、外部からの呼びかけ、友人の献血者、友人の医療関係者、ポジティブ・リアクション等である。「被援助経験、職業経験」は、直接は助けられた経験として意識されないという点で潜在的な被援助経験、職業経験である。これは潜在的であるので、図において点線で囲まれている。

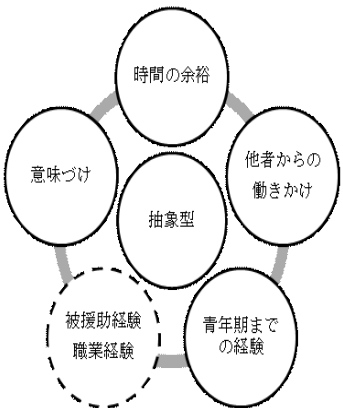

図２　③抽象型を支える５つの要素

次に、先の 5 つの要素のうち「時間の余裕」、「青年期までの経験」、「被援助経験、職業経験」について、さらに 2 つの類型を提示し説明を加える。

1つ目の類型として、現在保有する時間量に関する類型がある。「時間の余裕」は、家族と仕事の有無を尋ねることによって測ることができ、それによって「家族有・被雇用者型」、「主婦（主夫）型」、「単身・被雇用者型」、「単身・無職型」の4つに分けることができる。その結果、「単身・被雇用者型」、「単身・無職型」では時間の余裕があるため、献血に来やすいことが示された。「主婦（主夫）型」については、時間の余裕があると予想したが、家庭における家事等もあるためか、夫が献血者であると献血に来やすい他、子どもがいる場合は献血ルームに子どもを連れて来ることができる雰囲気があると献血に来る等、いくつか条件が見られた。「家族有・被雇用者型」は、20代後半から30代前半では、仕事に加え家族のことで忙しく、あまり献血に来ていない。

「青年期までの経験」と「被援助経験、職業経験」の有無によって分けたのが、類型の2つ目である。この類型によって分類すると、「被援助/職業有・青年期有型」、「被援助/職業無・青年期有型」、「被援助/職業有・青年期無型」、「被援助/職業無・青年期無型」の4つに分けられる。追加版の聞き取りを行った対象者には、「被援助/職業無・青年期無型」に該当する人々がいなかったことから、献血者には何かしらの経験を持つ人々が多いことがうかがえる。また、青年期までの経験がある場合に献血をするということは、教育の重要性を示唆する。

次に、献血者は同質な他者を想像するという問題が仮説として浮かんだ。問題設定においては、格差の増大により、異質性に基づく新たな他者理解が必要となるとした（白波瀬 2010）。しかしながら、実際に献血において用いられる想像力とは、異質な他者ではなく、同質な他者を想像するものであった。この同質な他者を想像する語りは、特にある想像力類型においてのみ見られるというものではなく、①可視型、②共感型、③抽象型すべてにおいて見られた。

①可視型や②共感型において被援助経験がある家族等、同質な他者を想像することは大きな問題であるように思われない。なぜなら、それは経験による想像力であり、実際の受け手と大きく異なる受け手像を抱いているわけではないからである。しかし③抽象型においては、同じく同質な他者を想像するといっても、事故やけがの人という、実際の受け手とは異なる受け手を想像する場合があり、③抽象型において同質な他者を想像することは、一種の問題をはらむ。献血者が抱いているように、同質の「幻想」を維持する仕組みがないと、献血は破綻するのか。つまり、実際には血液は、事故の場合にはほとんど使われず、その多くが高齢者医療に使われていることを知った場合、献血者の献血への意欲は低下するのか。さらにあえて偏見に満ちた言い方をするならば、血液が犯罪者に使われるとした場合等に、献血への意欲は低下するのか。加えて、けがによる同質な受け手を想像するままでは、血液が常時必要であるとは考えず、災害や大事故が起こった時に献血が必要で、そのときだけ献血をするということになるのではないか。この点については、今後さらに検討する必要がある。

6　知見の要約と今後の展望

得られた知見として、調査の結果献血における想像力は、直接経験等に基づく①可視型や②共感型と、そのような直接経験がもとで献血をしていない③抽象型に分けられた。③抽象型は、「時間の余裕」、「青年期までの経験」、「意味づけ」、「他者からの働きかけ」、「被援助経験、職業経験」の5つよって支えられている。さらに、「時間の余裕」については、家族と仕事の有無によって時間の余裕を測り、余裕がある場合に献血をしやすいとした。また、献血者は何らかの経験を有する人々が多く、その中でも、青年期までの経験を有するという点では、教育の重要性が示された。そして、献血が同質な受け手を想像するという危うい均衡の上に成り立っている可能性があることの問題が指摘された。

最後に今回の論文の限界と今後の展望について言及する。今回の調査の限界としては、1点目に、追加版の聞き取りの対象者に潜在的な被援助経験や職業経験を持つ人々が多かったことである。これらの経験がない人々についてより聞き取りを進めていく必要がある。しかしこの点から言えることは、献血者には、実際は被援助経験等を有する人々がある程度の数いるのではないかということである。2点目に、③抽象型については、依然として議論の余地があるということである。③抽象型は、様々な要素によって支えられていることは確認したが、どの要素が特に強いのかについて等さらに研究を進めることができるだろう。3点目に、献血においては、10代、20代の若年層の献血率の低下が問題となっていることからも、今後の展開としては、年代別に想像力を検討する必要がある。

参考文献

藤村正之，1987，「ヴォランタリー・アクションにおける想像力と意味付与―民間福祉財源システムとしての『あしながおじさん』制度」『季刊社会保障研究』22(4)：373-386.

白波瀬佐和子，2010，『生き方の不平等――お互いさまの社会にむけて』岩波書店.

Titmuss, Richard M., 1973, The Gift Relationship: From Human Blood to Social Policy, Suffolk: Penguin Books.